

春燈

7月号
July 2012



主宰の句

安立公彦

モノクロの写真大事に母の日来

淡々と回忌の新茶汲みゐたり

若きらの墓碑春光に懐かるる
(会津三句)

花の瞳の千の輝き鶴ヶ城

天平の面差し今にうららけし
(日光菩薩)



成瀬櫻桃子の句

安房風土記枇杷の花どき書き洩らす

『春燈』平成六年

平成五年の勉強会は房州の富浦ロイヤルホテルで開催された。辺りは枇杷の花時であった。富浦は毎年皇室に枇杷を献上している産地である。ところで、先生はよく世阿弥の「目前心後」を話された。「俳句でも大事なのは、先ず目の前のものをよく観察する。それに感動をかぶせる。しかし感動が先走ってはいけない。あくまでも具象性が大事だ」と。掲句、抑制の効いた挨拶句の手本だ。

木村傘休

成瀬櫻桃子の句

退職す駅前噴水にも別離

『風色』昭和四十八年

「二十年勤続の職場を去る」と前書がある。職場の近くの駅前の噴水は、先生が二十年に渡りそこを通る度に自身の心を映してきた。家庭や職場での喜怒哀楽等の起伏を噴水に託してきたであろう。そして、或るときは励まされ、あるときは癒やされたかもしれない。もう二度と見ることがないかもしれない噴水のががやきに別離の情があえかにこめられている。

田嶋洋子

燈下集



○ 西谷良樹

救急車病院に着く花吹雪

意地張つて亀の鳴くまで酌みにけり

尾を立ててきりりと鴨の残りけり

ぺんぺん草生えて満車の駐車場

遣り直しきかぬ子育て花は葉に

○ 綱徳女

この先に思ひ人住む夕ざくら

破帽愛し無口を通す桜守

恋蛩雨の葉うらに身をひそむ

余り苗ときをり風の来てなぶる

白鷺のつひに動けり入日中

○ 鈴木鳳来

燕来る造酒屋の税かな

筍の終の産衣を剥がしけり

葉桜や小学生の金釘

山車に乗る一丁前の次男坊

ぼうたんの崩るる刻の吐息かな

○ 阿部泰子

おぼろ月タワーの上を渡りけり

夏の夜や娘はほろよひのワイン手に

花しやうぶ咲いて今年もつつがなし

わがうたを指をり数へ夏の夜

夏の夜やとつぷり暮れてタワーの灯

○ 松本峰春

天気予報土燕の低う飛ぶをいふ

奥にまだ山桜ありその奥にも

囀の禁猟区域はみでて二羽

怠け癖とれぬ一枚春の海

とんぼ玉光殖やして夏めきぬ

○ 中野英伴

意地張るでなきほどの意地亀鳴けり

花冷やうしろめたさの背のほてり

意をゆるすひとなく独り紙風船

出る釘になれずしまひの亀鳴けり

あやまちと気づかぬ恋のおぼろかな

○ 木村傘休

遠足の親子に餅よく返る

階の上より声す春日傘

花曇もと来た道を戻りけり

潮干狩背中を風に曝しけり

空濛に風屯する暮春かな

○ 加藤良子

黒日傘ときには杖や九段坂

靖国祭青空市の遺書勳章

被災地の牛なき牛舎散る(悼)

みちのくの田圃に蛙鳴きをるや

婆の靴一番小さき子供の日

○ 鈴木静恵

残雪の浅間まぶしき峠茶屋

雪解風赤城を越ゆる九十九折

桃咲くや籠の村に蛾眉の月

湯の町の遠近ともる朧かな

「出女」や碓氷関所に春惜しむ

○ 菊地瑩子

あたしを詠へばいいと椿の落ちゆけり

色は黄色、花はフリージアが一番好き

探しにくるまで待つや五月の片つば靴

さくら散る姉逝き兄と私の世

勿忘草に忘るることの無き私

当月集

安立 公彦選



○ 川崎真樹子

缶入りのサクマドロップ振りて夏

父の日や水族館に深海魚

青田行く縄文人の裔として

白亜紀の地層を洗ふ滴りや

昭和とふほどよき遠さ麦こがし

○ 海村禮子

初燕水面あかるき淡海かな

囀や金の雨降る雑木山

春風やひらがな走る書道展

春泥や猫の足跡畳まで

羊歯若葉分けつつ上るケーブルカー

○ 齋藤晴夫

結界や門跡尼寺の白樺

藪鶯の行方尋ぬるすべのなく

清明や白き粉をふく竹の幹

墨壺の糸引くやうに燕来る

遅桜義経塚に暮れ残る

○ 藤原若菜

鳥獣の恋を抱きて山笑ふ

春昼の木々透く湖の光かな

母と見る昭和の映画うららし

菜飯田楽帰国の夫に調ふる

春の夜やひとり広ぐる世界地図

○ 小山繁子

春昼の起重機微動だにせずや

風みだす遅日の髪に手櫛かな

寧日や穀雨びかりの少女像

葉ざくらやマヌカン上目がちに佇つ

女学生胸張り歩む聖五月

春燈の句

安立 公彦選

万感の掌もて知覧の新茶汲む

千葉 神田 恵琳

牡丹の傘さす雨となりにけり

椿寿忌や空青あをと風もなく
著我の花降るとも見えぬ雨纏ひ
ととのひし婚の日取や初桜

白藤や扇供養てふ経ながれ

錠剤の色のこぼるる春の風邪

梨花淡し左右に分かるる女坂

草青む活断層の上に住み

泣きはせぬ男やもめの蜷汁

福島 森谷 達三

死ぬもよし生くるも楽し大雪解

はこべらや津波の揚げし船ねむる

床上げて八十八夜の人となり

花筵問はず語りに死生観

神奈川 石田 康明

酔ひどれに通らぬ世俗臘月

台本を読み浅草へ傘雨の忌

降るやうに雀降りきて夏に入る

神奈川 松田 千枝

初夏や古き仏の指長し

地謡の雷に乱るる牡丹忌

中州てふ遊び場ありて残る鴨

衣更へて発つときめたる下山かな
リラの香のかへらざる旅ありにけり

埼玉 滝澤 千枝

手の平に雨たしかむる夜の薄暑

洗ひ納めて結願の遍路杖

蝌蚪生るる千年杉の寺の池

千葉 小淵一美江

思ひ出のみどりや母の嫁菜飯

麦秋や目ぐすり左眼それ易し
眼科医を出でて真赤な葎買ふ



余言

安立公彦

天仰ぐ無口の夫や百千鳥

柴崎 富子

この「夫」は柴崎甲武信さん。テレビでご承知の通り、さる五月十一日夜、NHKテレビにご夫妻で出演された。戦後間もなく富子さんは洋画家中澤弘光氏描く「瀟颯」のモデルをされた。その一枚の絵を巡るお二人の純愛物語は、さながら映像から薫風が香るような思いだった。この絵は現在都城市立美術館に収蔵されている。地元の各新聞でも大きく取り上げられた。春燈一門の慶事である。喜ばしき限りない。

この句、「無口の夫」がいい。無口はお互いの理解の上になり立つ。それを「百千鳥」が良く表している。

種案山子太白星をかかげけり 松橋 利雄

「太白星」は金星の別称。「種案山子」は種時の終わつた苗代に立つ案山子。以前は良く目にした。

ひと日耕作に勤しむ農夫。今日の仕事も終りに近く、ふと見上げる空に宵の明星が輝いている。それはまさに種案山子の呼び掛けに応えるように、白く明るく光っていた。

往事、暦と農作業は切り離せない間柄にあった。それは二十四節気、七十二候を見れば明白だ。愛用の『月と季節の暦』には、金星の月ごとの動きも出ている。余談だが、八月十四日の早晩、「金星蝕」という現象が全国の東の空で見られるとのこと。(『月と季節の暦』より)

共に見し誰彼思ふさくらかな

鷹崎由未子

桜は日本の国花である。正にその通りだ。桜ほど開花の待たれる花はない。深く散る姿も、葉桜もまた善い。

四月下旬、会津若松鶴ヶ城で見た満開の桜は、今も記憶に残る。千本とも称される桜の開花は、見る者の心奥にさながら、*さまさま*の事おもひ出す桜並み芭蕉の思いを呼び戻す。作者の句、芭蕉の句をさらに焦点を絞って表現する。桜を見ていると、いつしかその華麗さの奥にある名状し難い思いに辿りつくのは作者だけではない。

「共に見し誰彼思ふ」はそのことを良く表している。「誰彼」の中心にはもとより亡き夫君の姿があるろう。「さくら」の本

意の一面を良く詠み込んでいる。

先達の会津訛や花の句座

和田 孝村

前句でも触れたが、会津若松の皆さんと本暈寺という寺の本堂で句座を共にした。会津天寧寺俳句会の指導者滝沢幸助氏をはじめ、集う皆さん全てに「会津訛」が感じられた。しかしその訛は、前日の午後から行動を共にしている私たちには、言葉の抑揚とともに何か知らの懐かしさを憶えるものだった。寺領の桜は一片も散らず、硝子戸越しにはの白く浮かび上がっていた。「花の句座」だった。

春シヨール夫には見せぬ顔のあり

和田 幸江

春燈の先人である坂間晴子さんに、
春シヨール夜は濃き霧となりけり〜という句がある。掲出句を見ている内に坂間さんの句を思い出した。この句は夜というものへの一種の畏れごころを表現している。

一方作者の句は多分に私小説的思いを読者に感じさせる。「夫には見せぬ顔」の感覚は鋭い。犀利な閃きを見るようだ。しかしこれは評者の見方であり、実際は女友逢への打ちつけた顔であるかも知れない。読み手の受ける振幅の大きい作品は、また内容も豊かだ。

たまゆらの瀬田の夕照比良八荒

小張 志げ

関西大会で出来た句を、構想を温め四月の本部句会に出された句。特々選に戴いた。調べがいい。「比良八荒」は、三月下旬琵琶湖左岸に吹き荒れる強風。

歴史のある古都の地には、自然現象にも洗練された名が多い。「比良八荒」などその一例だ。しかし大事なことは、その一例を見通さず表現に取り入れることである。

彼の世より仮の世に散る桜かな

佐渡合秀一

宗教と言うよりむしろ哲学的と呼ぶべき句だ。「彼の世」は死後の世界、「仮の世」は果敢無い現世。ここでは現世より死後の世界の方に存在感を見る。この次元の異なる「世」を「散る桜」が繋ぐ。まさしくこの句は亡き夫人への鎮魂の歌と言えよう。それを支えるのが、「彼の世」にも桜は咲くとする作者の信念である。

菜飯田菜帰国の夫に調ふる

藤原 若菜

「菜飯」も「田楽」も共に春菜を用いる料理。どの地方でも作られ、しかも季節感のある菜である。

作者は今「帰国の夫」にその菜を調理する。「帰国」とあるから夫君は海外に出張しているのだらう。どこの家庭にもあるような景に気持が解される。さらにそういう極く普通の内容を俳句に託すという姿勢がいい。確とした本意のある句を、然り気ない内容で表すのは簡単ではない。